

想われず、呼べば

真塚なつき

しばらく雨ばかりだつたので久しぶりにのぞいた青空
は手が届かないくらい高かつた。

出掛けようよ、とハヴァアはぼくの指をにぎつて言つた。

ようやく晴れたんだ、今がチャンスだよ、今しかないん
だよフズム。ハヴァアはぼくの名を愛おしげに呼ばわる。

フズム、ねえフズム、行こうよ、それともぼくを嫌いか
い。ねえ、ねえ応えておくれよフズム。

ダメだ。ぼくは答える。雨が止んだばかりではそこかしこが海になつてゐる。わかるだろう、きみも命は惜しいだろう、ハヴァア、聞き分けるんだ、ハヴァア。ハヴァアはいい子だろう、我慢するんだ。ぼくも何度もハヴァアの名を呼ぶ。呼んでやらないとハヴァアは自分が話しかけられているとわからぬのだ。それでとても不安になつて暴れ出してしまう。自分の周りに行き先不明の声が飛び交つているのがとても恐ろしいのだ。そうなるとぼくでも手がつけられなくて、疲れ果てるまで一生懸命暴れまわる。爪を噛んでるうちはまだ我慢しているけれど、腕を

想われず、呼べば

搔き箋つたり、髪の毛を引き抜いたり、わざと壁を蹴つて指を痛めたり、大きな岩に体当たりしたり、しまいには物見櫓に駆け上がつてそこから飛び降りたりしようとすると、とにかく手がつけられなくなる。

だからぼくらは森の奥深くのこの粗末な小屋に入れられている。ほんとうはハヴァア一人を入れると、村の会議ではそう決まつたのだけど、ぼくは自分で一緒に行くと決めた。ハヴァアは独りじやなんにもできないのだ、ぼくがついていてやらねば。

ねえフズム。ハヴァアが呼ぶ。ハヴァアは行き先不明の声

想われず、呼べば

が嫌いだ。だから自分でもはつきりと行き先の決まつた
言葉しか話さない。ハヴァは間違いのないようによくの
名を呼び、ぼくの瞳をしつかりとのぞきこんで、言う。
フズムは、ぼくが好きかい？

ああ好きだよ。好きでなければ一緒にはないさ、ハ
ヴァ。

本当かい、フズム。本当さハヴァ。ありがとうとハヴ
アは笑う。なにかお礼をしたいよ、とハヴァは言う。ぼ
くはそんなこと望んでいない。可愛そうなハヴァから何
かをまきあげるために一緒にいるのじやないのだ。それ

想われず、呼べば

よりお眠りよハヴァア、きみは昼寝が大好きだつたじやないか。ねえもう一眠りしようよ。

うん、フズム、それより出掛けようよ。今しかないつて気がするんだ。

——ああ、もういいかげんにしてくれ。うんざりなんだ。

僕は黙つてうなずきながら眼を閉じて横になつた。ハヴァアはしばらく未練がましくぼくの手を引いたりいじつたりしていたけど、おとなしく横になるのを感じて、ようやくぼくも眠りに落ちた。

想われず、呼べば

目を覚ますと夜になつていて。星が瞬いでいるから、どうやら空はまだ晴れているらしい。寝返りをうつて、小屋の様子がおかしいのに気づいた。ぼくの指をにぎる手の温もりがない。

ハヴァ。返事がない。ハヴァ、いるかい、ハヴァ。返事がない。

外に出てみると、やはりそこらじゅうが水浸しになつていた。この森は雨のおかげでいつもこんだ。眼を凝らして足元の泥土に這いつくばると、ささやかな星明かりに、ハヴァの小さな足跡がいくつも浮んで見えた。足

想われず、呼べば

痕はしばらく戸の前ではしゃぎ回り、小屋のぐるりを一周回り、それから森の奥の奥のさらにずっと奥深くにまつすぐ伸びていた。

あのバカ。

あいつはこの世界のことなんか全然わかつちやいない。森にどんな影が蠢いているか、海にどんな闇が潜んでいるか、どれだけの泥たちが獲物に喰らいつこうと牙を剥いて待っているかを、あいつは全然何も知らないのに。だから村の誰も近づかないこんなところに追いやられたのに。だからぼくが、一緒に来たのに。

想われず、呼べば

森の闇の奥から長い悲鳴と、水面を打つ鈍い音が流れ
てきた。飛びだそうとして、足元の泥と海に気を取られ
る。ぼくはこの森をよく知っている。影も闇も泥もよく
知つている。見上げる空の、星の瞬きは、手が届かない
くらい高い。

だけどぼくは駆け出した。ハヴァ。あいつの名を呼ぶ。
返事はない。ぼくは悲鳴のあつたほうに走る。泥に足を
とられ、影と闇に呑まれながら。

ハヴァ、ハヴァ、ハヴァ。ぼくの名前を呼んでくれよ
ハヴァ。ねえフズムつて、ぼくのこと好きかつて、しつ

想われず、呼べば

こく、うんざりするくらい訊いてくれよ。
ハヴァ、ハヴァ、ハヴァ。返事はない。もう永遠にな
いかもしねない。

それなら、この声は、いつたいどこに届くのだろうか。
泥と闇と影がぼくの足に食らいついた。

△
了
▽